

2020年5月7日(木)

老球の細道541号

日本バスケットボールのルール変遷史④〈3P エピソード〉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

バスケットボールのゲーム内容を大きく変化させた3Pルールは、当初バスケットボールの課題だった身長の高い選手の不利を克服するものとして考案された。しかし、前号でも述べたが、ヨーロッパの2メートルを超えるビッグマンたちがいち早く3P技術を身につけたために、あっという間に身長の高いプレイヤーたちのためのルール改正にはならなかったのである。

それまでは2メートルを超えるビッグマンはゴール下でリバウンドをとるか、ポストでゴリゴリ押し合いながら、できるだけゴールの近くで得点を取るのが主流であり、常識だった。バスケットボール王国アメリカのスタイルがその際たるものであった。

そのアメリカが1988年ソウル五輪で旧ソ連にゾーンディフェンスで守られ、アウトサイドシュートがまるっきり入らない、インサイドもゾーンで守られて攻められず、ミュンヘン五輪とは違って82対76の大差で敗退してしまった。その時の代表チームは大学生中心のメンバーで編成していたが。後にNBAでスーパースターとして活躍したデビット・ロビンソン、ダニー・マニングなどのすばらしいビッグマンを擁していたが、旧ソ連にはアルビダス・サボニス(現NBAのサボニスの父)がいた。結局アメリカは3位だった。

それまでバスケットボール五輪史の中で無敵を誇っていたアメリカであったが、遂に黄金時代は終了してしまった。この敗戦を機に、アメリカはアウトサイドシュート力の技術に力を注ぐと同時に、大学生中心の代表チーム構成からNBA選手の五輪出場に歴史を変えて王座奪回を目指すようになった。1992年バルセロナ五輪ドリームチームの誕生となる。しかし、アメリカ以外の国はさらに長身者のスキルアップと3Pシュート力の向上を図り、再びアメリカドリームチームを破るようになる。

そんな歴史の流れから、世界のバスケットボールはインサイドオフェンスから3Pシュート優先のオフェンスに大きな変化を見せてきた。その極めつけがスティファン・カリーやジェームズ・ハーデンだろう。彼らの凄いところは3Pラインをさらに離れた距離から、一人でドリブルやステップを使ってディフェンスを振り切って攻めきれることである。これからどれだけ3Pシュートの距離と精度が高まっていくのだろうか。それによって「3Pルール」がまた改正されるのだろうか。例えば、「距離が7メートル」、3点が「4点ルール」になる等。ルールは技術の変化、そしてゲームの内容とともに改正されていく。

最後に、3Pルールの導入はゲームの終盤を非常に面白くさせるようになった。ゲーム終盤残り1分位の場合で10点差が決してセフティリードにならなくなった。ファールゲームと3P成功によって簡単に逆転されるケースが増えた。私もかつてこのケースで勝てるゲームを落として、酒に慰められ、家族に当たり散らして何とか立ち上がった経験がある。